

# ひとをらぬところやすけし百千鳥

田中裕明（『夜の客人』）

春は小鳥の声が愉しい。「囀り」は求愛と縄張りの声であり、「百千鳥」は諸鳥の群鳴である。

「百千鳥」といえば飯田龍太の〈百千鳥雄蕊雌蕊を囃すなり〉をおもいだす。この句の誕生の瞬間は、『俳句という遊び』（小林恭二著／岩波新書）に詳しい。1990年4月、飯田龍太郎に、三橋敏雄・高橋睦郎・安井浩司・坪内稔典・小澤實・田中裕明・岸本尚毅の各氏が集い、二日続きの句会を行なった。その模様が実況中継のように小林恭二氏によってルポされている。あまりに面白く人気があったので新書版でアンコール復刊された本である。龍太さんの百千鳥の句は、二日目に全79句中の1句として投げられた。2点句だった。採ったのは三橋敏雄と田中裕明。年少の裕明は「百千鳥の句でこういうのないんじゃないかなと思いましたね」と控えめな発言。高橋睦郎さんが「伊藤若沖の絵みたい」と言い、句会終了後に「句会最高の一句だ」と言った句である。

ちなみに最高得点の句は2つある。〈春の炉のそばより電話くどくどと〉〈雉子鳴くつめたき富士と思ふかな〉。作者はいずれも岸本尚毅さんで、裕明はどちらも採っている。この句会では裕明作品は、何度も逆選をくらって最下位だったが、選句は安定していたようだ。

後年、2003年頃だったか、なぜか裕明がぼつりと言った。「最近『ゆう』の選句は病院の待合室でするんですよ」「え。うるさくないですか」「ええ、でもこの頃いちばん集中できる場所です」。自身の治療のための病院の待合室が、そのころもっともやすけき場所だったか。